GS01-5　強迫性障害モデル動物の作成と治療ターゲット探索

○浅岡 希美[1], 西谷 直也[1], 木ノ下 晴子[1], 永井 佑茉[1], 永安 一樹[1], 白川 久志[1], 中川 貴之[2], 金子 周司[1]
[1]京大院薬, [2]京大病院薬

強迫性障害(OCD)は、繰り返す『強迫観念』と強迫観念を打ち消すための『強迫行為』を主徴とする精神疾患である。症状は患者ごとに異なり、汚染を恐れて手洗いを繰り返す洗浄強迫や、戸締りが気にかかり何度確かめても安心できない確認強迫などの多様な症状が存在する。患者の多くは自らの強迫観念が不適切なものであることを認識しているが、抗うことができずに強迫行為を繰り返してしまうため、日常生活に著しい障害が生じる。本邦では、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)のみが治療薬として認可されているが、長期・高用量の服用が要求されるにもかかわらず奏効率は 50%程度である。症状の種類によってはSSRI の治療応答性が特に悪いものもあり、そうした症例にも有効な新しい治療薬が求められている。しかし、OCD 治療薬の開発は、妥当性ある評価系が構築されておらず長らく停滞しているのが現状である。一方で、臨床研究より OCD の病態はモノアミン異常に由来する不安症状の一種ではなく、前頭皮質などのグルタミン酸性興奮性入力の増加に由来する認知・行動調節の異常であるとの知見が得られつつある。そこで、本研究では臨床で得られた新規知見を反映する利便性・妥当性の高い OCD モデル動物の作成、評価を行った。さらに同モデルを用いて新規 OCD 治療薬候補の評価を行ったところ、SSRI と比較して優位性の高い OCD 治療ターゲットを見出すことができた。本シンポジウムでは上記の研究成果について報告し、新規 OCD 治療法開発について議論を行いたい。